

司法面接構造

©2024 Children's Advocacy Center Tsunagi

本文書の一部あるいは全部を無断で複写・複製（コピー、スキャン、デジタル化等）・転載することは、法律で認められた場合を除き、禁じられています。

司法面接構造の目的

子どもから最も完全で正確な情報を得るための効果的な質問方法は、研究¹に基づいている。さらに、司法面接のための段階的アプローチには、居心地の良さへの配慮、通常とは異なる会話における自分の役割を理解させるためのサポート、虐待の経験について詳細情報を提供するよう子どもに促すための方法などが含まれ、研究と実践²によって裏づけられている。

面接方法を、子どもの発達段階、トラウマの影響、文化的背景や言語に適応させることが推奨されているが、これをどのように達成すべきかについての科学的なガイダンス³は現在のところ限られており、日本の文化や言語へ直接的に対処するものではない。このプロジェクトの目標は、日本の子どもたちのニーズを特に考慮し、現在のエビデンスに基づいた実践を適応させることである。

推奨される質問の実践

子どもの記憶能力は複雑であり、神経生物学的発達、環境的背景、言語、トラウマに影響される⁴。目撃者である子どもに個人的な出来事について質問する際には、再生記憶と再認記憶とい

¹ Cyr, M. (2022). *Conducting interviews with child victims of abuse and witnesses of crime: A practical guide*. Routledge. DOI:10.4324/9781003265351

Lamb, M. E., Brown, D. A., Hershkowitz, I., Orbach, Y., & Esplin, P. W. (2018). *Tell me what happened: Questioning children about abuse* (2nd ed.). John Wiley & Sons. DOI:10.1002/9781118881248

Poole, D. A. (2016). *Interviewing children: The science of conversation in forensic contexts*. American Psychological Association. DOI:10.1037/14941-000

² Poole, D. A., & Lamb, M. E. (1998). *Investigative interviews of children: A guide for helping professionals*. American Psychological Association. DOI:10.1037/10301-000

Sternberg, K. J., Lamb, M. E., Hershkowitz, I., Yudilevitch, L., Orbach, Y., Esplin, P. W., & Hovav, M. (1997). Effects of introductory style on children's abilities to describe experiences of sexual abuse. *Child Abuse & Neglect*, 21(11), 1133-1146. DOI:10.1016/S0145-2134(97)00071-9

Saywitz, K., Goodman, G. & Lyon, T.D. (2017). When interviewing children: A review and update. In J. B. Klika & J. R. Conte (Eds.), *APSAC handbook on child maltreatment* (4th ed. pp. 310-329). Sage Publications, Inc.

³ Haboush, K. L., & Alyan, H. (2013). "Who can you tell?" Features of Arab culture that influence conceptualization and treatment of childhood sexual abuse. *Journal of Child Sexual Abuse*, 22(5), 499-518. DOI:10.1080/10538712.2013.800935

Hamilton, G., Brubacher, S. P., & Powell, M. B. (2016). Investigative interviewing of Aboriginal children in cases of suspected sexual abuse. *Journal of Child Sexual Abuse*, 25(4), 363-381. DOI:10.1080/10538712.2016.1158762

Katz, C., Tener, D., Marmor, A., Lusky-Weisrose, E., & Mordi, H. (2022). "Yes, my uncle, I'll do whatever you say": Experiences of Israeli Muslim Arab children during forensic interviews following child sexual abuse. *Journal of Interpersonal Violence*, 37(5-6), NP2465-NP2489. DOI:10.1177/0886260520943732

⁴ Cyr, *supra* note 1.

Lamb et al., *supra* note 1.

Leach, C., Powell, M. B., Sharman, S. J., & Anglim, J. (2017). The relationship between children's age and disclosures of sexual abuse during forensic interviews. *Child Maltreatment*, 22(1), 79-88. DOI:10.1177/1077559516675723

Walker, A. G., Kenniston, J., Inada, S. S., & Caldwell, C. (2013). *Handbook on questioning children: A linguistic*

う2つの異なるタイプの記憶プロセスを考慮することが有用である⁵。再生記憶 (Recall Memory) とは、特定の記憶喚起プロセスを指す。記憶された出来事を頭の中で再生し、それを言葉で説明しようとする行為である。子どもは、自分が最もよく覚えていて、言葉で表現できる情報を共有するように促される⁶。再認記憶 (Recognition Memory) とは、面接者から提供された情報に対して、子どもがその情報を自分の記憶と照らし合わせ、その出来事の詳細について回答するように求められる、異なる記憶のプロセスである⁷。質問の仕方は、子どもから提供される情報の正確さと量に大きく影響する。ナラティブを促す質問は、子どもに記憶を探り、自分の言葉で思い出せる限りの情報を提供するよう導く⁸。より焦点を絞った狭めた質問 (Focused Closed Questions) は、子どもに面接者の関心のある分野について考えさせるもので、子どもから提供される情報の量や種類を制限する可能性がある⁹。

再生質問には、**ナラティブの促し (Narrative Invitations)**、**焦点を絞ったナラティブの要求 (Focused Narrative Invitations)**、**WH質問**がある¹⁰。

ナラティブの促しは、特定の方向を指し示すことなく、子どもに話を続けさせ、追加情報を提供するように求めるものである。この種の質問は、幅を広げる質問 (breadth) と呼ばれることもある¹¹。このような質問は、子どもがあるトピックについて話し始めたときに有益である。なぜなら、面接者にとって関心のある内容に時期尚早に焦点を当てることがないためである。

perspective (3rd ed.). ABA Center on Children and the Law.

⁵ Lamb et al., *supra* note 1.

⁶ Lamb, M. E., & Brown, D. A. (2006). Conversational apprentices: Helping children become competent informants about their own experiences. *British Journal of Developmental Psychology*, 24(1), 215-234. DOI:10.1348/026151005X57657

Poole and Lamb, *supra* note 2.

Powell, M. B., & Snow, P. C. (2007). Guide to questioning children during the free-narrative phase of an investigative interview. *Australian Psychologist*, 42(1), 57-65. DOI:10.1080/00050060600976032

⁷ APSAC Taskforce. (2023). Forensic interviewing of children. The American Professional Society on the Abuse of Children (APSAC). https://www.apsac.org/_files/ugd/4700a8_d84d5dfe78b946659aef3d37fdf71b33.pdf

National Children's Advocacy Center. (2019). National Children's Advocacy Center's child forensic interview structure.

https://www.nationalcac.org/wp-content/uploads/2019/02/NCAC_CFIS_Feb-2019.pdf

⁸ APSAC, *supra* note 7.

Danby, M. C., & Sharman, S. J. (2023). Open-ended initial invitations are particularly helpful in eliciting forensically relevant information from child witnesses. *Child Abuse & Neglect*, 146, 106505.

DOI:10.1016/j.chiabu.2023.106505

⁹ Guadagno, B. L., Hughes-Scholes, C. H., & Powell, M. B. (2013). What themes trigger investigative interviewers to ask specific questions when interviewing children?. *International Journal of Police Science & Management*, 15(1), 51-60. DOI:10.1350/ijps.2013.15.1.301

¹⁰ NCAC, *supra* note 7.

¹¹ APSAC, *supra* note 7.

Danby & Sharman, *supra* note 8.

例:

- 「もっとお話ししてください。」
- 「続けてください。」
- 「次に何が起こりましたか？」
- 「それからどうなりましたか？」

焦点化されたナラティブの要求は、特定の話題に焦点をあてたオープン質問 (Focused Open Questions) である。焦点化されたオープン質問には、子どもが以前に話した単語やフレーズが含まれ、さらに詳しい情報、説明、明確化を求める¹²。このような質問は、焦点を絞った質問 (cued question) や深める質問 (depth question) と呼ばれることもある¹³。不自然にならないよう、常に同じ言い回しをする必要はない。

例:

- 「～についてもっと教えてください。」
- 「～について私ができるように手伝ってください。」
- 「～について詳しく教えてください。」
- 「～について説明してください。」

WH 質問は、オープンでナラティブを促すようなものでも、具体的で短い言葉や一言で返せるようなものでもよい。オープンな **WH 質問**も具体的な **WH 質問**も、子どもに情報提供を求めている¹⁴。しかし、具体的な **WH 質問**を多用して、特に面接者が知りたい内容に狭く焦点を絞った場合、子どもから得られる情報が制限される。

例:

- 「何が起こりましたか？」
- 「〇〇のとき何を考えていましたか？」
- 「彼はあなたに何を言っていましたか？」
- 「彼の名前は？」
- 「どんな風に感じましたか？」

¹² APSAC, *supra* note 7.

Lamb et al, *supra* note 1.

NCAC, *supra* note 7.

¹³ APSAC, *supra* note 7.

Danby & Sharman, *supra* note 8.

Lamb et al., *supra* note 1.

¹⁴ Andrews, S. J., Ahern, E. C., Stolzenberg, S. N., & Lyon, T. D. (2016) The productivity of Wh-prompts when children testify. *Applied Cognitive Psychology*, 30(3), 341–349. DOI:10.1002/acp.3204

Lyon, T. D., & Henderson, H. (2021). Increasing true reports without increasing false reports: Best practice interviewing methods and open-ended wh questions. *APSAC Advisor*, 33, 29-39.

専門家は、**多肢選択質問** (multiple choice questions) や**はい・いいえ型質問** (yes / no questions) を含む再認質問を時と場合によって使うことを認めている。面接者は、再認質問の問題点を理解し、その使用を控えめにするのが重要である¹⁵。選択肢がある質問 (option-posing questions) の使用は、他の質問方法がうまくいかないことが明らかになった後にのみ検討されるべきである¹⁶。

子どもが質問に戸惑っているような場合、**多肢選択質問**によって *WH 質問*で明らかにしたい内容が明確になることがある。推奨されているのは、子どもに2つの選択肢を与え、その後別の答えがある可能性を示す「その他」を続けることであるが、追加の「その他」の有効性は証明されていない¹⁷。幼い子どもは、質問 (multiple-choice prompts) を効果的に利用できない可能性がある。この種の質問は、幼い子どもには避けるか、慎重に使用する必要¹⁸がある。

例:

- 「服は着ていましたか、脱いでいましたか、それ以外ですか？」
- 「このことが起きたのは昼間でしたか、それとも夜でしたか？」
- 「リビングにいましたか、寝室にいましたか、それとも別の場所にいましたか？」

はい・いいえ型質問は、司法面接において様々な役割を果たす、選択肢がある質問 (option-posing questions) の一種である。**はい・いいえ型質問**は、「彼はあなたに何を言いましたか」とは対照的に、「彼はあなたに何か言いましたか」のように、子どもが情報を持っているか・持っていないかに配慮しながら、子どものナラティブに含まれていない特定の情報について聞くために使用することができる。子どもが「いいえ」と答えた場合、次に進む。子どもが「はい」と答えた場合、面接者は「彼があなたに言ったことをすべて話してください」とオープンな質問¹⁹を続ける。面接者は、被害の主だった部分を明確にするために、**はい・いいえ型質問**を使用することには慎重になるべきである。更なるナラティブな説明や明確化がなければ、単にはい・いいえの回答では不十分である。

¹⁵ Lamb, M. E., & Fauchier, A. (2001). The effects of question type on self contradictions by children in the course of forensic interviews. *Applied Cognitive Psychology*, 15(5), 483-491. DOI:10.1002/acp.726

Orbach, Y., & Lamb, M. E. (2001). The relationship between within-interview contradictions and eliciting interviewer utterances. *Child Abuse & Neglect*, 25(3), 323-333. DOI:10.1016/S0145-2134(00)00254-4

¹⁶ APSAC, *supra* note 7.

NCAC, *supra* note 7.

¹⁷ London, K., Hall, A. K., & Lytle, N. E. (2017). Does it help, hurt, or something else? The effect of a something else response alternative on children's performance on forced-choice questions. *Psychology, Public Policy, And Law*, 23(3), 281-289. DOI:10.1037/law0000129

¹⁸ Walker, *supra* note 4.

¹⁹ Poole, *supra* note 1.

Saywitz, K. J., & Camparo, L. B. (2009). Contemporary child forensic interviewing: Evolving consensus and innovation over 25 years. In B. L. Bottoms, C. J. Najdowski, & G. S. Goodman (Eds.), *Children as victims, witnesses, and offenders: Psychological science and the law* (pp. 102-127). Guilford Press.

はい・いいえ型質問は、虐待が他の場所で起こったか、他の加害者や被害者が関与しているかなど、子どもの出来事の説明には含まれていなかった内容を探る場合にも役に立つ。

例：

- 「ジョンが悪いことをしていた時、お母さんがどこにいたか知っていますか？」
- 「ジョンが別の家であなたに何かしたことはありますか？」
- 「ジョンが妹に何かするのを見ましたか？」
- 「ジョンがあなたに写真を見せたり、あなたの写真を撮ったりしたことがありますか？」

リフレクション（振り返り）とパラフレーズ（要約）

リフレクション（振り返り）とパラフレーズ（要約）（傾聴とも呼ばれる）は、便利なスキルであり、面接者をサポートする一つの方法²⁰である。リフレクションとは、子どもの言葉をそのままオウム返しすることである。面接者は子どもの言葉をリフレクションする習慣を身につけることで、子どもの話を注意深く聞くようになる。パラフレーズは、子どもの言葉を一字一句繰り返して言うのとは対照的に、子どもの発言の「ポイント」や重要な要素²¹をとらえるものである。リフレクションもパラフレーズも、面接者が子どもの話をよく聞いていることを伝えるものである。子どもによっては、面接者が自分の発言を繰り返して言うだけで、次の質問をされなくても話を続ける。リフレクションもパラフレーズも、子どもの視点からすると、受け入れられている、あるいは認められていると感じられ、サポートとなりラポールを強める可能性がある。ナラティブに話す力が弱かったり返答が短かったりする子どもには、発言を繰り返すこととフォローアップ質問を組み合わせることで、面接者から情報を提供することなく会話を整理することができる。

日本の子供達は一一般的にナラティブな会話の経験が少ないため、より焦点を絞ったオープン質問（more narrowly focused open questions）や *WH* 質問をする必要がある。また、日本人の子供達は従順に育てられ、面接者の提示する答えに容易に従ってしまうことがあるため、選択肢を提示する質問（option-posing questions）はリスクが高くなる。特に子供が質問の答えを知らない・情報を持っていないと既に言ったのにも関わらず、面接者が選択肢を提示する質問（option-posing questions）で聞き続けると、子供は答えを推測するようになりたり間違った情報をもたらしたりするようになる。

²⁰ Hershkowitz, I., Lamb, M. E., Katz, C., & Malloy, L. C. (2015). Does enhanced rapport-building alter the dynamics of investigative interviews with suspected victims of intra-familial abuse?. *Journal of Police and Criminal Psychology*, 30, 6-14. DOI: 10.1007/s11896-013-9136-8

Hershkowitz, I., Ahern, E. C., Lamb, M. E., Blasbalg, U., Karni - Visel, Y., & Breitman, M. (2017). Changes in interviewers' use of supportive techniques during the Revised Protocol training. *Applied Cognitive Psychology*, 31(3), 340-350. DOI:10.1002/acp.3333

Poole, *supra* note 1.

²¹ Evans, A. D., Roberts, K. P., Price, H. L., & Stefek, C. P. (2010). The use of paraphrasing in investigative interviews. *Child Abuse & Neglect*, 34(8), 585-592. DOI:10.1016/j.chiabu.2010.01.008

ソーシャルサポートの重要性

司法面接は子どもにとって馴染みがない。適切なソーシャルサポートをし、居心地よさや肩肘張らない雰囲気があることで、子どもは正確な情報を提供するためのモチベーションが上がる²²。暗示性や強制のない、親切な大人が関心を示したり励ましたりする際の一般的なサポートの方法であることが重要である。

幼い子どもに、より情報量の多い回答を促す質問方法を身につけるには、練習が必要であるのと同様に誘導と暗示のないソーシャルサポートを新たに学ぶ必要²³がある。話しながらない子どもと効果的にラポールを築くための推奨事項には、認知サポートと心のサポートの両方が含まれる²⁴。言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーション（姿勢、表情、リラックスした態度など）の両方が、ソーシャルサポートの重要な要素である。

認知サポートには、子どもが記憶を探り、ラポール形成とその後の被害のうったえのどちらも自由にナラティブに話すように促すオープン質問（open-ended questions）が含まれる。よく耳を傾け、子どもが話したことを繰り返すことは、面接者が関心を持ち注意を払っていることを示す。フォローアップ質問に、子どもが言った言葉やフレーズを含めることで、子どもは自分が聞かれている質問を理解しやすくなる。

心のサポートには、親しみやすくリラックスした態度をとること、子どもの非言語的・言語的に表れる耐えがたい様子に気づくこと、適切な（しかし暗示的ではない）言葉かけをすること、子どもが状況に慣れる前に被害に関する話題に移るのを控えることなどが含まれる²⁵。子どもがリラックスするためには、面接者がリラックスすることが重要である。

面接前の準備と計画

子ども自身や事件に関する事柄は、司法面接に影響を与えうる。面接前に計画を立てることは、不可欠である²⁶。

²² Hershkowitz et al., *supra* note 20.

Lewy, J., Cyr, M., & Dion, J. (2015). Impact of interviewers' supportive comments and children's reluctance to cooperate during sexual abuse disclosure. *Child Abuse & Neglect*, 43, 112-122.

DOI:10.1016/j.chiabu.2015.03.002

Saywitz et al., *supra* note 2.

²³ Hershkowitz et al., *supra* note 20.

²⁴ Blasbalg, U., Hershkowitz, I., Lamb, M. E., & Karni-Visel, Y. (2021). Adherence to the Revised NICHD Protocol recommendations for conducting repeated supportive interviews is associated with the likelihood that children will allege abuse. *Psychology, Public Policy, and Law*, 27(2), 209- 220. DOI:10.1037/law0000295

Saywitz, K. J., Wells, C. R., Larson, R. P., & Hobbs, S. D. (2019). Effects of interviewer support on children's memory and suggestibility: Systematic review and meta-analyses of experimental research. *Trauma, Violence, & Abuse*, 20(1), 22-39. DOI:10.1177/1524838016683457

²⁵ Lewy et al., *supra* note 22.

Saywitz et al., *supra* note 2.

²⁶ APSAC, *supra* note 7.

Lamb, et al., *supra* note 1.

NCAC, *supra* note 7.

子ども自身に関する情報:

- 年齢と発達段階
- 疾患の有無と服薬
- 文化的、言語的配慮
- 家族構成と親権
- 身体の一部を子どもがどのように呼んでいるか
- 関連する家や学校でのルーティン

調査／捜査上の考慮事項:

- 事件の内容
- 通報に至った経緯
- 最初の通報からの経過時間
- 以前の聞き取り内容と、聞き取りから得られた結果

必要最低限の情報は、子どもが話したがらなかつたり、言語能力が限られていたりするような複雑な要因を予測して面接を構成したり、面接者がそれに合わせた面接計画を立てるのに役立つ²⁷。面接者は事前情報に影響されて子どもを特定の目標に向かわせないように留意しなければならない。

司法面接の段階

司法面接の段階的アプローチは、あらゆる面接手順²⁸で推奨されている。その中には、ラポールを形成し、子どもを居心地良くし、会話における自分の役割を子どもに理解させるための次のようなステップが含まれる。

Poole, *supra* note 1.

²⁷ Garcia, F. J., Brubacher, S. P., & Powell, M. B. (2022). How interviewers navigate child abuse disclosure after an unproductive start in forensic interviews. *International Journal on Child Maltreatment: Research, Policy and Practice*, 5(3), 375-397. DOI:10.1007/s42448-022-00121-0

Lyon, T. D. (2005). Ten step investigative interview.

http://www.caichildlaw.org/Misc/Ten_Step_Investigative_Interview.pdf

Powell, M. B. (2005). Improving the reliability of child witness testimony in court: The importance of focusing on questioning techniques. *Current Issues in Criminal Justice*, 17, 137.

²⁸ APSAC, *supra* note 7.

Lamb, M. E., Orbach, Y., Hershkowitz, I., Esplin, P. W., & Horowitz, D. (2007). A structured forensic interview protocol improves the quality and informativeness of investigative interviews with children: A review of research using the NICHD Investigative Interview Protocol. *Child Abuse & Neglect*, 31(11-12), 1201-1231.

DOI:10.1016/j.chiabu.2007.03.021

Lyon, *supra* note 27.

NCAC, *supra* note 7.

- 自己紹介
- 初期交流
- 面接の説明
- ナラティブの練習

自己紹介

面接者は、子どもの発達段階に応じた自己紹介と面接者の役割（「注意深く話を聞き、子どものことを知ること」）、面接の記録方法（手書きのメモ、音声、ビデオ録画）、他のチームメンバーの存在とその役割、必要に応じて休憩を取って良いことなどを説明する。情報や説明は、長々続けたり形式張ったものであってはならず、子どもの年齢や言語能力に合わせるべきである²⁹。

初期交流

面接者は、まず子どものことを知りたいと興味を示すことから始めるべきである（「私は〇〇さんと今日初めて会いました。〇〇さんのことを知りたいと思っています。自分のことについて何か教えてください」）。もし、この質問が子どもを戸惑わせるようであれば、「どんなことをするのが楽しいですか？」など、焦点を絞ることもできる。オープン質問を投げかけて、子どもが答えた話題について説明したり、描写したり、詳しく話したりするように促すと良い。こうすることで、面接は子どもに焦点が当てられ、子どもが話したいと思っている話題への関心が示された状態で始められる。子どもは面接者を、自分という人間に関心を持つ親しみやすい人であると実感する³⁰。

面接の説明

初期交流の段階では、ラポールの確立に重点を置く。面接の説明とナラティブの練習（ラポールを形成しながら）は、大人と子どもとの普段の会話とは対照的に、この会話における自分の役割を子どもに理解させる。面接は子ども自身についてであり、子どもに起きた出来事についてであるため、質問の答えを知っているのは子どもだけである。面接者はそのことを子どもに気付かせる必要がある。不必要な言葉を使わずに各説明を明確に伝え、子どもに「練習」する機会を与えるには、面接者の訓練が必要である³¹。

²⁹ APSAC, *supra* note 7.

NCAC, *supra* note 7.

Walker, *supra* note 4.

³⁰ Blasbalg, U., Hershkowitz, I., & Karni-Visel, Y. (2018). Support, reluctance, and production in child abuse investigative interviews. *Psychology, Public Policy, and Law*, 24(4), 518–527. DOI:10.1037/law0000183
Hershkowitz et al., *supra* note 20(2015)(2017).

Poole, *supra* note 1.

³¹ Dickinson, J. J., Brubacher, S. P., & Poole, D. A. (2015). Children's performance on ground rules questions: Implications for forensic interviewing. *Law and Human Behavior*, 39(1), 87-97. DOI:10.1037/lhb0000119
Fessinger, M. B., McWilliam, K., Bakth, F. N., & Lyon, T. D. (2021). Setting the ground rules: Use and practice of ground rules in child forensic interviews. *Child Maltreatment*, 26(1), 126-132. DOI:10.1177/1077559520910783

例:

- 私が質問をして、〇〇さんがその答えを知らなかったら、知らないと教えてください。知らないことは知っているふりをしないでくださいね。
- 私が間違っている時は、私に間違っているよと言って、正しい言葉を教えて下さいね。
- 私が質問する時に、私が言っていることが難しくて分からない時は、分からないと言ってください。
- 今日は本当のことをお話することがとても大切です。本当に〇〇さんに起きたことだけを話してください。

「instructions」は、日本語では「お願い」「約束」「説明」など、少しずつニュアンスや語感が異なる言葉があるが、普段の会話との違いを子どもが理解できるように、面接する子どもに合わせて面接者が選択して良い。

ナラティブの練習

子どもは、日常の話し方よりもずっと詳しく、特定の出来事に関する説明をすることが要求される³²。ナラティブの練習では、最近あった楽しい出来事や中立的な出来事について、最初からできる限り詳しく思い出して説明する機会を与える（まさに「～について教えて」の練習である）。大抵の子どもは、最初の説明で覚えていることをすべて話すわけではない。そのため面接者はフォローアップの焦点を絞った自由回答質問（follow-up focused open questions）で、追加の詳細・説明・明確化を求めていく。ナラティブの練習を首尾よく行えば、面接者が子どもの話を注意深く聞き、誘導的・暗示的でないフォローアップ質問をする助けとなる³³。

有力な研究は、被害の出来事の初めから終わりまでを、子どもに自分の言葉で説明させることが、より正確で完全な説明につながることを示している。更なる詳細や明確化を求めするために追加で質問しなければならない場合でも、フォローアップ質問に子どもが使った言葉や説明を入れると子どもは理解しやすい。

このようなコミュニケーション方法は、ほとんどの日本の子どもにとって馴染みのないものである。最近の楽しいまたは中立的な出来事に焦点を当てた「話す練習」が役に立つ。話す練習をうまくさせるには、面接者も努力と練習が必要である。

³² Lamb & Brown, *supra* note 6.

³³ Brown, D. A., Lamb, M. E., Lewis, C., Pipe, M. E., Orbach, Y., & Wolfman, M. (2013). The NICHD investigative interview protocol: An analogue study. *Journal of Experimental Psychology: Applied*, 19(4), 367-382. DOI:10.1037/a0035143

Price, H. L., Roberts, K. P., & Collins, A. (2013). The quality of children's allegations of abuse in investigative interviews containing practice narratives. *Journal of Applied Research in Memory and Cognition*, 2(1), 1-6. DOI:10.1016/j.jarmac.2012.03.001

初期段階の重要性

初期のラポール形成と説明の段階は、子どもにとって普段とは異なる会話の基盤を構築するものである。面接者は、初期段階を重要と考えるべきである。面接者が関心を向けてくれることに自信を持ち、話したくない話題についても話そうとする子どもの意欲に影響することが多い³⁴だけでなく、面接者との会話方法に自信を持てるようになる。

申し立てに焦点を当てた段階

面接者は、「今日は何をお話しに来てくれましたか？」のような、可能な限りオープンな質問で申し立て段階に移行するよう試みるべきである³⁵。子どもによっては、特に最初の事件や被害の可能性の発見から時間が経過している場合、より焦点を絞った移行質問が必要となる。通告者は、子どもの面接者への開示の意欲や、移行への適切な質問を知る手がかりとなる。多くの子どもは、被害のうったえを大人にした後に面接を受ける。しかし、目撃者の供述、性的接触を示す医学的診断、危機的状況もしくは治療中の情報開示、写真・文章または何らかの通信によって発見された情報、加害者の自白などにより面接を受けにくくすることもある³⁶。このような状況下では、子どもはこれまで被害の「うったえ」をしておらず、自分の経験について話す準備があまりできていない可能性がある。また、子どもが家族や捜査機関に開示したことで状況が悪化したり否定的な発言を受けた経験がある場合、それが面接者への開示をためらわせることもある³⁷。

面接者は、焦点を絞った移行の質問 (focused transition questions) にあたり、十分信頼できる情報や事実があるか見極めるために、最初の報告書や以前の面接結果を見直すことが推奨される³⁸。

子どもが被害の事実を認めたら、面接者は、子どもから質の高い豊富な情報を得るために、オープンな質問やプロンプトを用いて、再生(リコール)によるナラティブの段階³⁹に移る。面接者

³⁴ Cyr, *supra* note 1.

Hershkowitz et al., *supra* note 20(2015)(2017).

Poole, *supra* note 1.

³⁵ Cyr, *supra* note 1.

Lamb et al., *supra* note 1.

Lyon, *supra* note 27.

Poole, *supra* note 1.

³⁶ APSAC, *supra* note 7.

Garcia et al, *supra* note 27.

NCAC, *supra* note 7.

³⁷ Cyr, *supra* note 1.

McElvaney, R. (2015). Disclosure of child sexual abuse: Delays, non-disclosure and partial disclosure. What the research tells us and implications for practice. *Child Abuse Review*, 24(3), 159-169. DOI:10.1002/car.2280

³⁸ APSAC, *supra* note 7.

Lamb et al., *supra* note 2.

NCAC, *supra* note 7.

³⁹ Cyr, *supra* note 1.

は、子どもの言葉による出来事の描写や説明をできる限り多く得るために、子どもが以前に口にした言葉やフレーズを取り入れた、焦点を絞ったナラティブの要求 (focused narrative questions) を用いるべきである。面接者は、クローズド質問 (closed questions) や選択肢を提示するようなプロンプト (option-posing prompts) の使用にすぐに移るような衝動を抑えるべきである。記憶を呼び起こす妨げとなるため、子どもの言葉や行為の説明を求めるために子どものナラティブを中断すべきではない⁴⁰。面接中もペーシングは重要であり、面接者は子どもが考える時間を設けるべきである。選択肢を提示する質問 (option-posing questions) は控えめにし、必要な場合にのみ用いるべきである⁴¹。

虐待が複数回あった場合、子どもは被害の要点やスクリプト記憶を提供することから始めるかもしれない⁴²。このような区別がつかない虐待の語りの中で、子どもは特定の出来事について言及し、子どもにとって分かりやすいやり方で出来事にラベル付けをすることがある (例えば、「兄の部屋にいた時」、「母が祖母の具合が悪かったので見舞いに行った時」、「ある時、兄が私のお尻におちんちんを入れようとしたが、痛すぎた」など)。子どものこのような言及は、エピソード記憶の詳細が含まれる可能性のある、特定の出来事を示す。覚えている出来事に対して子どものラベルを使用することで、子どもが1つのエピソードに集中できるようになる⁴³。子どもが要点やスクリプト記憶しか話さない場合、面接者は、「よく覚えている時のことについて教えてください」、「いつもと違うことが起こったとき」、「いつもと違う場所で起こったとき」、「いつもと違うやり方で起こったとき」などのプロンプトを使用して、子どもをそ

Danby & Sharman, *supra* note 8.

Lamb et al., *supra* note 28.

Lamb et. al, *supra* note 1.

Lyon, *supra* note 27.

Poole & Lamb, *supra* note 2.

⁴⁰ Guadagno et al., *supra* note 9.

⁴¹ Lamb & Fauchier, *supra* note 15.

London et al., *supra* note 17.

Lyon & Henderson, *supra* note 14.

⁴² Brubacher, S. P., Malloy, L. C., Lamb, M. E., & Roberts, K. P. (2013). How do interviewers and children discuss individual occurrences of alleged repeated abuse in forensic interviews. *Applied Cognitive Psychology*, 27(4), 443-450. DOI:10.1002/acp.2920

Brubacher, S. P., Powell, M. B., & Roberts, K. P. (2014). Recommendations for interviewing children about repeated experiences. *Psychology, Public Policy, and Law*, 20(3), 325-335. DOI:10.1037/law0000011

Guadagno et al., *supra* note 9.

Saywitz, K. J., & Camparo, L. B. (2014). Evidence-based child forensic interviewing: The developmental narrative elaboration interview. Oxford University Press, USA.

⁴³ Brubacher et al., *supra* note 42(2013)(2014).

Brubacher, S. P., Peterson, C., La Rooy, D., Dickinson, J. J., & Poole, D. A. (2019). How children talk about events: Implications for eliciting and analyzing eyewitness reports. *Developmental Review*, 51, 70-89.

DOI:10.1016/j.dr.2018.12.003

のエピソードに集中させようと試みる⁴⁴。場合によっては、子どもは最初か直近の出来事を思い出すことができるかもしれないが、それらは子どもにとって必ずしも記憶に残るものではない⁴⁵。非常にナラティブに語れる子どもであっても、情報提供者としての経験が不足しているため、出来事の詳細を考えたり話したりすることが苦痛や恐怖を伴うため、あるいは出来事の細部に注意を払わなかったために、司法的に重要な詳細を省略すること⁴⁶がある。情報提供者（子どもであれ大人であれ）は、経験した事柄について完全な情報を保持しているわけではないことは広く知られている。子どもの発達段階の面からのみ見れば、幼ければ幼いほど蓄えられる情報は少なくなる⁴⁷。欠けている部分の情報を子どもに聞く際、面接者は、非常に焦点を絞った質問や具体的な質問（highly focused or specific questions）を用いることと、推測や暗示の危険性⁴⁸とを、天秤にかけることになる。

子どもの返答が曖昧だったり聞き取れない場合は、リフレクションやパラフレーズを使って確認し、焦点を絞ったナラティブの要求や WH 質問で情報を得て明確化する。

回数や日時のような⁴⁹何らかの特定する要素は、捜査関係者にとっては知りたいことだが、子どもにはラベル付けされていない可能性がある。司法的に関連性のある詳細（位置や衣服など）の明確化は、若い子どもが口頭で説明するには困難な場合⁵⁰がある。体の構造は子どもが理解す

⁴⁴ NCAC, *supra* note 7.

⁴⁵ Brubacher et al., *supra* note 42(2013).

⁴⁶ Cyr, *supra* note 1.

Lamb, M. E., Malloy, L. C., & La Rooy, D. J. (2011). Setting realistic expectations: Developmental characteristics, capacities and limitations. In M. E. Lamb, D. J. La Rooy, L. C. Malloy, & C. Katz (Eds.), *Children's testimony: A handbook of psychological research and forensic practice*, (2nd ed. pp.15-48). Wiley-Blackwell.

DOI:10.1002/9781119998495

Lamb et al., *supra* note 1.

⁴⁷ Lamb, M. E., Sternberg, K. J., Orbach, Y., Esplin, P. W., Stewart, H., & Mitchell, S. (2003). Age differences in young children's responses to open-ended invitations in the course of forensic interviews. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 71(5), 926-934.

DOI:10.1037/0022-006X.71.5.926

Lamb et al., *supra* note 46.

Walker, *supra* note 4.

⁴⁸ Orbach & Lamb, *supra* note 15.

⁴⁹ Friedman, W. J. (1986). The development of children's knowledge of temporal structure. *Child Development*, 57(6), 1386-1400. DOI:10.2307/1130418

Friedman, W. J., & Lyon, T. D. (2005). Development of temporal-reconstructive abilities. *Child Development*, 76(6), 1202-1216. DOI:10.1111/j.1467-8624.2005.00844.x-i1

Orbach, Y. & Lamb, M. E. (2007). Young children's references to temporal attributes of allegedly experienced events in the course of forensic interviews. *Child Development*, 78(4), 1100-1120. DOI:10.1111/j.1467-8624.2007.01055.x

McWilliams, K., Lyon, T. D., & Quas, J. A. (2019). Maltreated children's ability to make temporal judgments using a recurring landmark event. *Journal of Interpersonal Violence*, 34(4), 873-883. DOI:10.1177/0886260516645812

⁵⁰ Stolzenberg, S. N., & Lyon, T. D. (2017). 'Where were your clothes?' Eliciting descriptions of clothing placement from children alleging sexual abuse in criminal trials and forensic interviews. *Legal and Criminological*

るには難しいため、貫通の明確化は推測になりやすく非常に問題⁵¹となる。子どものナラティブの中に含まれる詳細は、通常、より信頼できると考えられている⁵²。

子どもは、性的な行為に気付いていなかったり、意味を理解していなかったり、表現する言葉を持っていなかったりする。

子どもへの面接に現在の研究を反映させると、従来の（法制度に基づく）実践方法に対して試練を与えるものになる可能性がある。

話したがる子どもに対応するための戦略

子どもが面接者と「秘密を共有する」⁵³ことに躊躇することがある。内的及び外的な要因⁵⁴によりすべての子どもの支えとなる単一の対応は存在しないが⁵⁵、子どもが居心地悪くなく面接者と話せるようにソーシャルサポートを増やしラポール形成を強めること⁵⁶や、面接の被害事実にふれる部分でより焦点を絞った質問を活用すること⁵⁷などが推奨される。話したがる、または緊張している子どもには、最初にその出来事を絵に描かせ、それから言葉による説明に進ませることで、恥ずかしさを和らげ、子どもの表現方法を増やし、記憶を再生する方法として役立つ⁵⁸。WH質問は、選択肢を提示する質問（option posing questions）に頼る前にすべきであり、

Psychology, 22(2), 197-212. DOI:10.1111/lcrp.12094

Stolzenberg, S. N., McWilliams, K., & Lyon, T. D. (2017). Spatial language, question type, and young children's ability to describe clothing: Legal and developmental implications. *Law and Human Behavior*, 41(4), 398-409. DOI:10.1037/lhb0000237

⁵¹ Milam, L. J., & Nugent, W. R. (2017). Children's knowledge of genital anatomy and its relationship with children's use of the word "inside" during questioning about possible sexual abuse. *Journal of Child Sexual Abuse*, 26(1), 23-39. DOI:10.1080/10538712.2016.1269863

⁵² Guadagno et al., *supra* note 9.

Orbach & Lamb, *supra* note 49.

⁵³ McElvaney, R., Greene, S., & Hogan, D. (2012). Containing the secret of child sexual abuse. *Journal of Interpersonal Violence*, 27(6), 1155-1175. DOI:10.1177/0886260511424503

⁵⁴ Alaggia, R., Collin-Vézina, D., & Lateef, R. (2019). Facilitators and barriers to child sexual abuse (CSA) disclosures: A research update (2000-2016). *Trauma, Violence, & Abuse*, 20(2), 260-283. DOI:10.1177/1524838017697312

McElvaney, *supra* note 37.

⁵⁵ Garica et al., *supra* note 27.

⁵⁶ Hershkowitz et al., *supra* note 20(2015)(2017).

Lewy et al., *supra* note 22.

⁵⁷ Andrews et al., *supra* note 14.

Powell, *supra* note 27.

Lyon & Henderson, *supra* note 14.

Saywitz et al., *supra* note 2.

⁵⁸ Katz, C., & Hamama, L. (2013). "Draw me everything that happened to you.": Exploring children's drawings of sexual abuse. *Children and Youth Services Review*, 35(5), 877-882. DOI:10.1016/j.childyouth.2013.02.007

Katz, C., & Hershkowitz, I. (2010). The effects of drawing on children's accounts of sexual abuse. *Child Maltreatment*, 15(2), 171-179. DOI:10.1177/1077559509351742

その後さらなる説明を求めるためのオープン質問が続く⁵⁹。

司法面接は、子どもが被害者となる事件の調査／捜査全体の一部に過ぎない。何が起こったのかを正確に明らかにするために、すべての負担を子どもに負わせるのは不公平である。子どもが話したがらない時には、子どもが話す機会のために大人が十分な努力をすべきである。裏付けとなる証拠、他者からの供述、被疑者への面接は、子どもの供述にあるギャップを埋めるために重要である。

面接者の言葉かけとして、『私はたくさん子どもたちに会って話をすることで、子どもたちの安全を守る手助けをしています。〇〇さんのことで私が何か知っておいたほうがよいことはありますか』『私は子どもたちからお話を聞く仕事をしています。恥ずかしい気持ちから話せない子どもも多いけれど、ここでは何を話しても良いですし、どんなことを言われても驚きません。』といったものが考えられる。

このような言葉かけは、一部の子どもには効果的でも、性被害について話すことを禁じられている家庭や文化で育った子どもには効果が無い場合がある。

チームのチェックイン

面接が別室からチームメンバーによって確認されている場合、面接者は面接室から出て、追加の質問や明確化の必要があるかどうか確認する。もしあれば、発達段階に適した方法で、どのようにその質問をするのが最善かを検討する⁶⁰。

クロージング

クロージングでは、子どもの面接に来てくれたことに感謝し、中立的または楽しい会話に戻ることが敬意に値する。面接者は、子どもが話した後どのように感じているかを尋ね、必要に応じて安心感を与えサポートするために、子どもの様子を確認する。

Macleod, E., Gross, J., & Hayne, H. (2013). The clinical and forensic value of information that children report while drawing. *Applied Cognitive Psychology*, 27(5), 564-573. DOI:10.1002/acp.2936

⁵⁹ Andrews et al., *supra* note 14.

Lyon & Henderson, *supra* note 14.

⁶⁰ APSAC, *supra* note 7.

NCAC, *supra* note 7.

参考文献

- Alaggia, R., Collin-Vézina, D., & Lateef, R. (2019). Facilitators and barriers to child sexual abuse (CSA) disclosures: A research update (2000-2016). *Trauma, Violence, & Abuse, 20*(2), 260-283. DOI:10.1177/1524838017697312
- Andrews, S. J., Ahern, E. C., Stolzenberg, S. N., & Lyon, T. D. (2016) The productivity of Wh-prompts when children testify. *Applied Cognitive Psychology, 30*(3), 341–349. DOI:10.1002/acp.3204
- APSAC Taskforce. (2023). Forensic interviewing of children. The American Professional Society on the Abuse of Children (APSAC).
https://www.apsac.org/_files/ugd/4700a8_d84d5dfe78b946659aef3d37fdf71b33.pdf
- Blasbalg, U., Hershkowitz, I., & Karni-Visel, Y. (2018). Support, reluctance, and production in child abuse investigative interviews. *Psychology, Public Policy, and Law, 24*(4), 518–527. DOI:10.1037/law0000183
- Blasbalg, U., Hershkowitz, I., Lamb, M. E., & Karni-Visel, Y. (2021). Adherence to the Revised NICHD Protocol recommendations for conducting repeated supportive interviews is associated with the likelihood that children will allege abuse. *Psychology, Public Policy, and Law, 27*(2), 209- 220. DOI:10.1037/law0000295
- Brown, D. A., Lamb, M. E., Lewis, C., Pipe, M. E., Orbach, Y., & Wolfman, M. (2013). The NICHD investigative interview protocol: An analogue study. *Journal of Experimental Psychology: Applied, 19*(4), 367-382. DOI:10.1037/a0035143
- Brubacher, S. P., Malloy, L. C., Lamb, M. E., & Roberts, K. P. (2013). How do interviewers and children discuss individual occurrences of alleged repeated abuse in forensic interviews. *Applied Cognitive Psychology, 27*(4), 443-450. DOI:10.1002/acp.2920
- Brubacher, S. P., Peterson, C., La Rooy, D., Dickinson, J. J., & Poole, D. A. (2019). How children talk about events: Implications for eliciting and analyzing eyewitness reports. *Developmental Review, 51*, 70-89. DOI:10.1016/j.dr.2018.12.003
- Brubacher, S. P., Powell, M. B., & Roberts, K. P. (2014). Recommendations for interviewing children about repeated experiences. *Psychology, Public Policy, and Law, 20*(3), 325-335. DOI:10.1037/law0000011

- Brubacher, S. P., Roberts, K. P., & Powell, M. (2012). Retrieval of episodic versus generic information: Does the order of recall affect the amount and accuracy of details reported by children about repeated events? *Developmental Psychology*, 48(1), 111-122.
DOI:10.137/a0025864
- Cyr, M. (2022). *Conducting interviews with child victims of abuse and witnesses of crime: A practical guide*. Routledge. DOI:10.4324/9781003265351
- Danby, M. C., & Sharman, S. J. (2023). Open-ended initial invitations are particularly helpful in eliciting forensically relevant information from child witnesses. *Child Abuse & Neglect*, 146, 106505. DOI:10.1016/j.chiabu.2023.106505
- Dickinson, J. J., Brubacher, S. P., & Poole, D. A. (2015). Children's performance on ground rules questions: Implications for forensic interviewing. *Law and Human Behavior*, 39(1), 87-97.
DOI:10.1037/lhb0000119
- Evans, A. D., Roberts, K. P., Price, H. L., & Stefek, C. P. (2010). The use of paraphrasing in investigative interviews. *Child Abuse & Neglect*, 34(8), 585-592.
DOI:10.1016/j.chiabu.2010.01.008
- Fessinger, M. B., McWilliam, K., Bakth, F. N., & Lyon, T. D. (2021). Setting the ground rules: Use and practice of ground rules in child forensic interviews. *Child Maltreatment*, 26(1), 126-132. DOI:10.1177/1077559520910783
- Friedman, W. J. (1986). The development of children's knowledge of temporal structure. *Child Development*, 57(6), 1386-1400. DOI:10.2307/1130418
- Friedman, W. J., & Lyon, T. D. (2005). Development of temporal-reconstructive abilities. *Child Development*, 76(6), 1202-1216. DOI:10.1111/j.1467-8624.2005.00844.x-i1
- Garcia, F. J., Brubacher, S. P., & Powell, M. B. (2022). How interviewers navigate child abuse disclosure after an unproductive start in forensic interviews. *International Journal on Child Maltreatment: Research, Policy and Practice*, 5(3), 375-397. DOI:10.1007/s42448-022-00121-0
- Guadagno, B. L., Hughes-Scholes, C. H., & Powell, M. B. (2013). What themes trigger investigative interviewers to ask specific questions when interviewing children?. *International Journal of Police Science & Management*, 15(1), 51-60.
DOI:10.1350/ijps.2013.15.1.301

- Haboush, K. L., & Alyan, H. (2013). "Who can you tell?" Features of Arab culture that influence conceptualization and treatment of childhood sexual abuse. *Journal of Child Sexual Abuse*, 22(5), 499-518. DOI:10.1080/10538712.2013.800935
- Hamilton, G., Brubacher, S. P., & Powell, M. B. (2016). Investigative interviewing of Aboriginal children in cases of suspected sexual abuse. *Journal of Child Sexual Abuse*, 25(4), 363-381. DOI:10.1080/10538712.2016.1158762
- Hershkowitz, I., Ahern, E. C., Lamb, M. E., Blasbalg, U., Karni - Visel, Y., & Breitman, M. (2017). Changes in interviewers' use of supportive techniques during the Revised Protocol training. *Applied Cognitive Psychology*, 31(3), 340-350. DOI:10.1002/acp.3333
- Hershkowitz, I., Lamb, M. E., Katz, C., & Malloy, L. C. (2015). Does enhanced rapport-building alter the dynamics of investigative interviews with suspected victims of intra-familial abuse?. *Journal of Police and Criminal Psychology*, 30, 6-14. DOI: 10.1007/s11896-013-9136-8
- Katz, C., & Hamama, L. (2013). "Draw me everything that happened to you.": Exploring children's drawings of sexual abuse. *Children and Youth Services Review*, 35(5), 877-882. DOI:10.1016/j.chilyouth.2013.02.007
- Katz, C., & Hershkowitz, I. (2010). The effects of drawing on children's accounts of sexual abuse. *Child Maltreatment*, 15(2), 171-179. DOI:10.1177/1077559509351742
- Katz, C., & Hershkowitz, I. (2012). The effect of multipart prompts on children's testimonies in sexual abuse investigations. *Child Abuse & Neglect*, 36(11-12), 753-759. DOI:10.1016/j.chiabu.2012.07.002
- Katz, C., Hershkowitz, I., Malloy, L. C., Lamb, M. E., Atabaki, A., & Spindler, S. (2012). Non-verbal behavior of children who disclose or do not disclose child abuse in investigative interviews. *Child Abuse & Neglect*, 36(1), 12-20. DOI:10.1016/j.chiabu.2011.08.006
- Katz, C., Paddon, M. J., & Barnett, Z. (2016). Emotional language used by victims of alleged sexual abuse during forensic investigation. *Journal of Child Sexual Abuse*, 25(3), 243-261. DOI:10.1080/10538712.2016.1137666
- Katz, C., Tener, D., Marmor, A., Lusky-Weisrose, E., & Mordi, H. (2022). "Yes, my uncle, I'll do whatever you say": Experiences of Israeli Muslim Arab children during forensic interviews

- following child sexual abuse. *Journal of Interpersonal Violence*, 37(5-6), NP2465–NP2489. DOI:10.1177/0886260520943732
- Lamb, M. E., & Brown, D. A. (2006). Conversational apprentices: Helping children become competent informants about their own experiences. *British Journal of Developmental Psychology*, 24(1), 215-234. DOI:10.1348/026151005X57657
- Lamb, M. E., Brown, D. A., Hershkowitz, I., Orbach, Y., & Esplin, P. W. (2018). *Tell me what happened: Questioning children about abuse* (2nd ed.). John Wiley & Sons. DOI:10.1002/9781118881248
- Lamb, M. E., & Fauchier, A. (2001). The effects of question type on self contradictions by children in the course of forensic interviews. *Applied Cognitive Psychology*, 15(5), 483-491. DOI:10.1002/acp.726
- Lamb, M. E., Malloy, L. C., & La Rooy, D. J. (2011). Setting realistic expectations: Developmental characteristics, capacities and limitations. In M. E. Lamb, D. J. La Rooy, L. C. Malloy, & C. Katz (Eds.), *Children's testimony: A handbook of psychological research and forensic practice*, (2nd ed. pp.15-48). Wiley-Blackwell. DOI:10.1002/9781119998495
- Lamb, M. E., Orbach, Y., Hershkowitz, I., Esplin, P. W., & Horowitz, D. (2007). A structured forensic interview protocol improves the quality and informativeness of investigative interviews with children: A review of research using the NICHD Investigative Interview Protocol. *Child Abuse & Neglect*, 31(11-12), 1201-1231. DOI:10.1016/j.chiabu.2007.03.021
- Lamb, M. E., Sternberg, K. J., Orbach, Y., Esplin, P. W., Stewart, H., & Mitchell, S. (2003). Age differences in young children's responses to open-ended invitations in the course of forensic interviews. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 71(5), 926-934. DOI:10.1037/0022-006X.71.5.926
- Leach, C., Powell, M. B., Sharman, S. J., & Anglim, J. (2017). The relationship between children's age and disclosures of sexual abuse during forensic interviews. *Child Maltreatment*, 22(1), 79-88. DOI:10.1177/1077559516675723
- Lewy, J., Cyr, M., & Dion, J. (2015). Impact of interviewers' supportive comments and children's reluctance to cooperate during sexual abuse disclosure. *Child Abuse & Neglect*, 43, 112-122. DOI:10.1016/j.chiabu.2015.03.002

- London, K., Hall, A. K., & Lytle, N. E. (2017). Does it help, hurt, or something else? The effect of a something else response alternative on children's performance on forced-choice questions. *Psychology, Public Policy, And Law*, 23(3), 281-289. DOI:10.1037/law0000129
- Lyon, T. D. (2005). Ten step investigative interview.
http://www.caichildlaw.org/Misc/Ten_Step_Investigative_Interview.pdf
- Lyon, T. D., & Henderson, H. (2021). Increasing true reports without increasing false reports: Best practice interviewing methods and open-ended wh questions. *APSAC Advisor*, 33, 29-39.
- Macleod, E., Gross, J., & Hayne, H. (2013). The clinical and forensic value of information that children report while drawing. *Applied Cognitive Psychology*, 27(5), 564-573.
DOI:10.1002/acp.2936
- Malloy, L. C., Lyon, T. D., & Quas, J. A. (2007). Filial dependency and recantation of child sexual abuse allegations. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 46(2), 162-170. DOI:10.1097/01.chi.0000246067.77953.f7
- McElvaney, R. (2015). Disclosure of child sexual abuse: Delays, non-disclosure and partial disclosure. What the research tells us and implications for practice. *Child Abuse Review*, 24(3), 159-169. DOI:10.1002/car.2280
- McElvaney, R., Greene, S., & Hogan, D. (2012). Containing the secret of child sexual abuse. *Journal of Interpersonal Violence*, 27(6), 1155-1175. DOI:10.1177/0886260511424503
- McWilliams, K., Lyon, T. D., & Quas, J. A. (2019). Maltreated children's ability to make temporal judgments using a recurring landmark event. *Journal of Interpersonal Violence*, 34(4), 873-883. DOI:10.1177/0886260516645812
- Milam, L. J., & Nugent, W. R. (2017). Children's knowledge of genital anatomy and its relationship with children's use of the word "inside" during questioning about possible sexual abuse. *Journal of Child Sexual Abuse*, 26(1), 23-39.
DOI:10.1080/10538712.2016.1269863
- National Children's Advocacy Center. (2019). National Children's Advocacy Center's child forensic interview structure. https://www.nationalcac.org/wp-content/uploads/2019/02/NCAC_CFIS_Feb-2019.pdf

- Orbach, Y. & Lamb, M. E. (2007), Young children's references to temporal attributes of allegedly experienced events in the course of forensic interviews. *Child Development*, 78(4), 1100-1120. DOI:10.1111/j.1467-8624.2007.01055.x
- Orbach, Y., & Lamb, M. E. (2001). The relationship between within-interview contradictions and eliciting interviewer utterances. *Child Abuse & Neglect*, 25(3), 323-333.
DOI:10.1016/S0145-2134(00)00254-4
- Poole, D. A. (2016). *Interviewing children: The science of conversation in forensic contexts*. American Psychological Association. DOI:10.1037/14941-000
- Poole, D. A., & Lamb, M. E. (1998). *Investigative interviews of children: A guide for helping professionals*. American Psychological Association. DOI:10.1037/10301-000
- Powell, M. B. (2003). A guide to introducing the topic of an interview about abuse with a child. *Australian Police Journal*, 57(4), 259-263
- Powell, M. B. (2005). Improving the reliability of child witness testimony in court: The importance of focusing on questioning techniques. *Current Issues in Criminal Justice*, 17, 137.
- Powell, M. B., & Snow, P. C. (2007). Guide to questioning children during the free-narrative phase of an investigative interview. *Australian Psychologist*, 42(1), 57-65.
DOI:10.1080/00050060600976032
- Price, H. L., Roberts, K. P., & Collins, A. (2013). The quality of children's allegations of abuse in investigative interviews containing practice narratives. *Journal of Applied Research in Memory and Cognition*, 2(1), 1-6. DOI:10.1016/j.jarmac.2012.03.001
- Saywitz, K. J., & Camparo, L. B. (2014). *Evidence-based child forensic interviewing: The developmental narrative elaboration interview*. Oxford University Press, USA.
- Saywitz, K. J., & Camparo, L. B. (2009). Contemporary child forensic interviewing: Evolving consensus and innovation over 25 years. In B. L. Bottoms, C. J. Najdowski, & G. S. Goodman (Eds.), *Children as victims, witnesses, and offenders: Psychological science and the law* (pp. 102-127). Guilford Press.
- Saywitz, K., Goodman, G. & Lyon, T.D. (2017). When interviewing children: A review and update. In J. B. Klika & J. R. Conte (Eds.), *APSAC handbook on child maltreatment* (4th

ed. pp. 310-329). Sage Publications, Inc.

Saywitz, K. J., Wells, C. R., Larson, R. P., & Hobbs, S. D. (2019). Effects of interviewer support on children's memory and suggestibility: Systematic review and meta-analyses of experimental research. *Trauma, Violence, & Abuse*, 20(1), 22-39.

DOI:10.1177/1524838016683457

Sternberg, K. J., Lamb, M. E., Hershkowitz, I., Yudilevitch, L., Orbach, Y., Esplin, P. W., & Hovav, M. (1997). Effects of introductory style on children's abilities to describe experiences of sexual abuse. *Child Abuse & Neglect*, 21(11), 1133-1146.

DOI:10.1016/S0145-2134(97)00071-9

Stolzenberg, S. N., & Lyon, T. D. (2017). 'Where were your clothes?' Eliciting descriptions of clothing placement from children alleging sexual abuse in criminal trials and forensic interviews. *Legal and Criminological Psychology*, 22(2), 197-212. DOI:10.1111/lcrp.12094

Stolzenberg, S. N., McWilliams, K., & Lyon, T. D. (2017). Spatial language, question type, and young children's ability to describe clothing: Legal and developmental implications. *Law and Human Behavior*, 41(4), 398-409. DOI:10.1037/lhb0000237

Walker, A. G., Kenniston, J., Inada, S. S., & Caldwell, C. (2013). *Handbook on questioning children: A linguistic perspective* (3rd ed.). ABA Center on Children and the Law.